

1

くまさん

はるが きて
めが さめて
くまさん ぼんやり かんがえた
さいているのは たんぽぽだが
ええと ぼくは だれだつけ
だれだつけ

はるが きて
めが さめて
くまさん ぼんやり かわに きた
みずに うつつた いいかお みて
そうだ ぼくは くまだった
よかったな

まじ・みちお著
「ポケット詩集」より

3

亡くなった人がどこにいるのかと
考えたくなるのだけれど、
どこにしようがいるまいが、かまわない。
その人が生きたせいで、ここにあるもの。
そいつが、生き続けているのだ。

こどもがいたら、こどもはまさしくそういう存在だ。
その人が買ったもの、つくったもの、書いたもの、
その人が語ったことば、怒ったもの、悲しんだもの、
その人が抱きしめたもの、その人が育んだもの、
その人が別れたもの、その人が歩いた道、

その人が吸った空気、その人が祈ったこと、
すべて、そのまま、その人が死んだからといって
いつぺんに消えたわけではない。
そして、ものも、ことばも、場所も、思いも、
その人が死んだあとも、続きを生きている。

それを「あの人は生きている」と、言っていいたいと思う。
亡くなった人がどこにしようと、どこでも続きをやっている。
ぼくが死んでも、そうなると思うと、なんだかうれしい。

糸井重里著

「他人だったのに。」より

2

節分のこと

子どものころ、私の家族はじつに厳格に節分の行事を行った。父親が鬼のお面をかぶったりはしなかったが、家族四人で豆を持ち、家のすべての窓、出入り口から、「鬼はーそとー、福はーうちー」とやってまわった。間違えて「福はーそとー」と言ってしまうと、母はかなり本気で「間違ってる！」と指摘し、「福はーうちー」と声をはりあげて訂正するのであった。

その後、煎った豆を年の数だけ食べる。数え年というのが厄介だった。私は豆類をあんまり好んで食べないが、しかし節分の豆は不思議にあとを引く。三粒四粒と続けて食べているうちに、もつともつと食べたくなってくる。しかし数え年の数しか食べてはいけない。いつも十数粒しか食べられず、四十粒前後食べている父や母やおばが、うらやましくてならなかった。この「数え年のぶん豆を食べる」というのは、大人が決めたに違いないと思っていた。自分たちがたくさん食べるために。

節分の行事はその日だけでは終わらなかった。翌日、数え年と同じ数の豆を和紙に包んで、近所の川に投げ入れに行くのである。橋からぼーんと和紙を投げ、そして帰ってくるのだが、家に着くまでけつしてふりむいてはいけない、と言われていた。毎年、少々身を固くしてふりむかないようにして帰ってきた。

大人になつてからこの話をする、「いつたいてこの地方？」とよく言われるのでびつくりした。いろんな人に聞いてみたが、「豆の入った和紙を川に投げ入れ、ふりむかずに帰る」という風習を持っている人は、私のまわりで皆無であった。あれはいつたいなんだったのだろうか？ もしや私の両親もしくは祖母が考え出した奇習？

—— 中略

私はひとり暮らしがずいぶん長いし、子どももいないので、豆まきをしなくなつて久しい。両親のように、豆の威力を信じていないのである。そのことがちよつとさびしい。節分近くなると、コンビニエンスストアやお菓子屋さんにいろんなパッケージの豆が並ぶ。気が向くと買って、年の数など気にせずぼりぼり食べている。いくらでも食べられるとなると、やつぱりそうおいしいものでもない。

角田光代著

「よなかの散歩」より

4

花

いちりんの花をとつて
その中を ごらんなき
じつと よく見てごらんなき
花の中に町がある
黄金にかがやく宮殿がある
人がいく道がある 牧場がある
みんな いいにおいの中で
愛のように ねむっている

ああ なんとという美しさ
なんという平和な世界
大自然がつくりだした
こんな小さなものの中にも
みちみちている清らかさ

この花の けだかさを
生まれたままの美しさを
いつまでも 心の中にもつて
花のように
私たちは生きよう

村野四郎著

「ポケット詩集Ⅱ」より